

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、往きよりとて逢もせぬ事なれば、全くいづら事よてあれど、見しと思ふ心は誘もれて、此く往き通ひて居る事よとの心なり、兄のも、同じ心なれど、少し、詞をかへより、

見るごにもせめてと思ふ心より

むなしき道を往きかよひつゝ

讀人志らず

人志れず思ふこゝろをおほしまの

なるとこそ無しよなげくころかな

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の意の、自身、人よ知られずして思ひて居る事の、多くあるが、其の多くある思ひの、成るといふ事も無くて、此の頃の、唯ぞ歎きてのみ居る事よとの心なり、大島の、備前ありて、阿波の鳴門も、近き事なれば、取合せていへるなり、兄のも、同じ心なり、

思ふ事成るこそ無しよ大島の

磯回の波をかけぬ日ぞなき

讀人志らず

うつゝもそりなき事コトのあやしきを

ねなくも夢ユメの見ゆるミなりけり

此の歌も、後撰集に見えたる歌にて、其の意ハ、目の覺めて居る時よも、そりなく奇アヤシしき事のあるハ、寢ネもせぬよ、夢を見る事なりとの心なり、寢ネもせぬよ、夢の見ゆとの、目前メノマヘよ、ちらつきて見ゆるミ幻マボロシにて、夢の如きものなり、兄のも、同じ心なり、

物モノおもふうつゝの影カゲのまぼろしを

寐ネもせで夢ユメの見ゆるミなりけり

源等朝臣

あづま路ミチの佐野サノの船橋フナバシかけてのみ

思オモひこふるをシ知る人ヒトのなき

此の歌も、後撰集に見えたる歌にて、其の意ハ、上野カミツケの佐野サノといふ地トコロの、船フナ

橋を懸けてあるが、其の船橋のやうよ、人よ、心を懸けて、思ひをさりてあるを、其の人の、知らずてあるよ、何とりして、知らせなき事よとの心なり、兄のも、同じ心なり、

一八二

上野の佐野の船橋かけておもふ

人を渡さんすべの知らなく

此の本歌の作者、源等朝臣の、嵯峨天皇の御曾孫よて、中納言希卿の子なり、醍醐天皇の延喜二年の薨去なりともいひ、村上天皇の天曆五年よ薨じさりともいへり、

紀貫之

涙よもおもひの消ゆる物ならむ

いとかくむねを焦さばらまし

此の歌も、後撰集よ見えたる歌よて、其の意の、自身ミツカラの、此の燃ゆるおもひが、涙よて消ゆる物ならば、涙の、かまなく間も無く流れて居る事故、此く、胸を焦す事ナミダの無きよ、思ひよ焦るゝを見れば、涙よての、消えぬ物と思ふるとの心なり、兄のも、同じ心なり、

涙ナミダも消キえぬおもひをさながらよ

たゞ焦コガるゝよまりせてぞおく

讀人志らず

人妻ヒトツマよこゝろあやなくかけ橋ハシの

あやふき道ミチを戀コヒよぞありける

此の歌も、後撰集よ見えざる歌よて、其の意の、戀コヒといふ懸橋カケハシの、危アヤフきものよ、

物モノの文理アヤメも見えずて、人妻ヒトツマよもかけて行くが、何ナニと危アヤフき道ミチの、此の戀コヒよての無ナシきりとの心ココロなり、兄ケイのも、同じ心ココロなれど、人妻ヒトツマよの掛カくなと禁イマシめて詠イマシみより、

闇ヤミを行ユく道ミチよそありとも人妻ヒトツマの

あやふき橋ハシをかけずもあらなん

坂上是則

相見アヒミても慰ナグサむやとぞおもひしよ

なごりしもこそ戀コヒしりりけれ

此の歌も、後撰集に見えたる歌にて、其の意の、思ふ人よ逢ふ事の出来たるなら  
ば、苦しき心も慰まんりと思ひて、辛じて逢ひて見れば、此の度の、其の逢ひ  
たる餘波にて、まゝ戀しくなりたるよ、兎は角は、戀といふ物の、苦しきもの  
なりとの心なり、兄のも、同じ心なり、

相見ての後のこゝろをかねてより

かくあらんごも思ひやせし

此の本歌の作者、坂上是則の、醍醐天皇の御代の頃の人にて、坂上田村麻呂の  
裔なりといふ、

紀貫之

ありつきのなりらましりむ白露の

おきて侘しきこりれせましや

此の歌も、後撰集に見えたる歌にて、其の意の、夜明といふ時の無りしなら  
ば、此の起きて別るといふ侘しき事も無りらんよ、如何しても、曉といふ物の  
ある故よ、侘しくつらき思ひを爲ねばならぬが、何としても苦しきものなりと  
の心なり、此の、古い、夫婦の、多くの同居せずて、夫の、妻の許よ、毎夜よ

通ひ往きて、曉アカツキの、別れて歸る習慣ナラハシなりしりらなり、白露シラツユのといへるの、露ツユの、曉方アカフキはおく物なれば、起オキくといもんとて、枕詞マクラコトバよしさるなり、兄ケイのも、同じ心なれど、詞をかへさり、

一八八

白露シラツユのおきて侘ワビしき別ワカれよそ

雞トリさへ聲コエを添ツへて鳴ナくなり

讀人志らず

むつまじき妹背イモセの山ヤマの中ナカよさへ

隔ヘダつる雲クモのそれそれずもあるかな

此の歌も、後撰集に見えたる歌にて、其の意の、妹背山イモセヤマの妹背イモセの中ナカの、睦ムツじき事なるべけれど、其の睦ムツじき山ヤマの間マよさへ、隔ヘダつる雲クモの、晴ハれ難ナくてあれど、況マして、妹背イモセとも定サらぬ、二人フタリの中ナカよの、隔ヘダての雲霧クモキリの、幾重イクヘもあるが、實マコトよ、侘ワビしき事よとの心なり、兄ケイのも、同じ心なり、

妹背イモセの山ヤマをへどつる河霧カハギリの

それぬ思オモひよ沈シヅむころ哉カナ

讀人志らず

笹蟹ササガニの空ソラよすかけりる糸イトよりも

こゝろぼそしや絶ツツえぬと思オモへむ

此の歌も、後撰集に見えざる歌にて、其の意ハ、蜘蛛クモの、巢スをかくるハ、細ホソき糸イトを、空ソラよ、幾條イツスヂも出して、風カゼの吹くよ委マカせおきて、其の糸イトの、木キの枝エなどよ繋カれる時、其の糸イトを便タヨリとして、次第シダイよ、網アミを結びて行く事なるガ、其の風カゼの吹くよ委マカせておく糸イトよりも、心細ココロホソクく思オモへる事ハ、自身ミツカラと人ヒトとの中の絶ツツえんり

と思へる事なりとの心なり、兄ケイのも、同じ心なり、

蜘蛛クモの糸イトの心ココロぼそきそ憂ウレき人の

風カゼをも待マたで絶ツツゆるなりけり

紀貫之

あさなく梳クツれむ落オつる落髮オチガミの

みだれて物モノをおもふころかな

此の歌の、拾遺集に見えたる欺よて、其の意の、毎朝、髪を梳れば、髪カミの脱ヌけ  
ゑるが、櫛クシよつきて落オちつもる事あり、其の落オちつもれる髪カミの、亂カれてあるや  
うよ、心も暗クれ惑マひて、人ヒトを思オモひよ亂カれてある頃なりとの心なり、兄ケイのも、同  
じ心なり、

乱カれつゝ物モノを思オモへむ落オち髪カミの

心ココロさへこそ結ムスばゝれけれ

藤原敦忠朝臣

相ア見ミてのノ後ノチのこゝろよくらぶれむ

むりし物モノをおもそざりけり

此の歌も、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、思オモふ人ありて、心ココロも結ムスばれて  
在アりし程ハの、一度よても逢アふ事コトを得ユしならバ、慰ナグサむ方カタもあらんりところ思オモひよ  
りしよ、辛カラウじて逢アひて見ミれば、まゝ更サは逢アひさくなりて、心ココロも亂カるゝをりりよ  
なりさり、夫ツれを、昔ムカシの、未イマだ逢アふさざりし時トキよくらぶれば、逢アふさざりし時トキの、



物思モノオモひとても無りりしやうよてあるのとの心なり、兄も、詞ウタの變れど、同じ心なり、

一九四

かゝらんごかねて知りせむ逢坂アツサカの

關セキを越えずてあらましもものを

讀人志らず

ころもふよ中ナカよありしをうととりさ

逢アをぬ夜ヨをさへ隔ヘダてつるかな

此の歌も、拾遺集に見えたる歌よて、其の心の、思オモふ人と、二人フタリよて寢ネる時よの、衣コロモよても、其の間アヒダよある時の、親シタシみを妨サマタぐるやうよ思オモそれしを、今イマの奈イカ何ニ、衣コロモを隔ヘダつる如ごとき事コトり、二人フタリの間アヒダよの、夜ヨを隔ヘダて、逢アそれぬ時トキもあるよ、何ナニと苦クしき事コトよての無ムきりとの心ココロなり、兄ケイのも、同じ心ココロなり、

ひとつ身ミと思オモひしものを衣キヌをさへ

夜ヨをさへよこそ隔ヘダてそめけれ

一九五

紀貫之

色もなきこゝろを人よ染めしより

うつろをもんとそ我がおもをもなくよ

此の歌も、拾遺集よ見えざる歌よて、其の意の、物の色ならば、冷むるなどの事もあるれど、色よての無き、心を、人よ染めざるなれば、冷むるなどの事の思はずてありしを、此の頃の、其の染められざる人の色も冷めざるやうよて、本の如くの無きの、さての、何とせんとの心なり、兄のも、同じ心なり、

色もなき言の葉さへよ移ろひぬ

人のこゝろよ秋し立ちてそ

讀人志らず

玉河よさらすてづくりさらくよ

むりしの人の戀しきやなぞ

此の歌も、拾遺集よ見えざる歌なるが、萬葉集よての、玉河よさらすてづくり

さら／＼よなぞも此の子のこゝろ悲しきとあり、歌の心の、武藏の玉河よてり、  
てづくりといふ布を晒すが、其の布を晒す、さら／＼よ、まさ、昔の人の戀し  
くなりさるの、何故ならんらとの心なり、一二の句の、三の句の、さら／＼よ  
を言もんハシコトガの序よて、枕詞の如き語なり、萬葉集の、下句の心の、何故よ、  
此の女の、深く、心よしみて思もるゝらとの心なり、兄のも、同じ心を詠みさ  
り、

玉河タマガハよさらすてづくり更サガへり

むりしの人の戀コヒしりるらん

讀人志らず

石の上イシノウエふるのやしるのゆふとすき

かけてのみやを戀コヒひんと思オモひし

此の歌も、拾遺集よ見えさる歌よて、其の心の、思ふ人よ逢アむんとてこそ、神  
よも、願ガランをかけさる事なれ、然るよ、逢アむれもせぬを思へば、唯タゞ、心よかけ  
て戀コヒひんとのみの願ガランをかけさるやうなれど、何故よ、さる願ガランをかくべきぞ、逢ア  
ひさしと思へばよてこそあれとの心なり、一二の句の、唯タゞ、神をいもん爲よ

て、木棉ユフダスキ襷ダスキとい、木棉ユフをもて作れる襷タスキよて、神祭カミノマツリなどよ用ふる物なれば、襷タスキをかくといふ心よて、かけての枕詞マクラコトバよいへるなり、兄ケイのも、同じ心なり、

逢坂アフサカの關セキをこそそ木棉ユフだすき

こゝろよかけて祈いのりしものを

讀人志らず

たらちねの親オヤのいさめしうふゝねを

物モノおもふときのさざよぞありける

此の歌も、拾遺集よ見えざる歌よて、其の意の、假寢ウタネのすなと、親オヤの、平生ツツナよ諫め給ひし、今こそ、心よしみされ、此の假寢ウタネといふ物の、物おもふ時のしこざよてありしよ、さて、親オヤの、物おもひのすなといひしよこそとの心なり、兄ケイも、此の假寢ウタネを詠みたり、

思オモひこびすべの志こころらねむうゝねの

夢路ユメヂをさへまたごりてぞ行く

紀貫之

うりりけるふしをぞすて、白糸シライトの

今くる人とおもひなさん

此の歌も、拾遺集に見えざる歌にて、其の心の、これまでの憂ウレき節フシの多りりし  
の捨て、今よりの、新アタラしく來さる人なりと思ひてくれよとの心なり、糸イトよりの、  
節フシもあり、まよ、繰クるといふ事もあれば、糸イトの縁エシをもていへるなり、兄イの同  
じ、

憂ウレきふしを捨てしものりら苧手卷オダマキの

いご繰返クリカヘす物おもひぞする

紀貫之

思オモひかね妹イモがり行ユけむ冬の夜フユの

河風カハカゼさむみ千鳥チドリ鳴ナくなり

此の歌も、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、人ヒトの事コトを思オモひかねて、今宵コヨヒ

二〇四  
そとて出で、行けば、冬の夜の事とて、河風も寒ければ、千鳥なども鳴きささじ、  
げど、此の寒天サムシラよも行りでのえあらずて、往く事なるよとの心なり、兄のも同じ、

千鳥なく冬の夜河の河風の

身よまむ妹も忘れかねつゝ

讀人志らず

なげ木のみまげき深山のほとゝぎす

木がくれ居ても音をのみぞ鳴く

此の歌の、大和物語オホトモノガタリに見えたる歌にて、其の意の、深山ミヤマよの、種々の木も立ちてあれど、なげきといふ木の、殊コトは繁シゲく立ちてある故よ、郭公ホトトギスの、木の間は隠れて居ても、聲コエを立て、鳴くが、自身ミツカラの、人なる故よ、深山ミヤマよも居ねど、隠るゝ方も無くて、泣ナきて居るを、人の、知らぬ顔カホにてあるよとの心なり、兄のも、同じ心なり、

なげ木のみまげき深山のほとゝぎす

うべ血よのみを鳴きこころらん

読人志らず

時雨する稻荷の山のもみぢ葉の

あをりりしより思ひそめてき

此の歌の、古今著聞集に見えざる歌にて、其の意の、稻荷山の紅葉の、まど青  
りりし頃より思ひそめてありしなりとの心なり、此の、和泉式部の、稻荷社よ  
詣でんとして行きける道にて、時雨よあひされば、道の傍の田よ立ちざる男よ

り、襖といふ雨具を借りて、著て参りたりしよ、其の翌日、一人の男来て、消  
患文やうの物を出しされば、披きて見ざるよ、詞の無くて、此の歌を書きてあ  
りしなり、襖を借りざるを、紅葉の青りりしよ、よせて詠みざるなど、極めさ  
る歌の上手なり、されば、兄の、此の事、畢竟、雨の降りざるより起りたる  
事なり、雨よ降らざりせば、紅葉をいふ人も無りりしならめとて、次の歌を  
詠みたり、

稻荷山時雨しなくむ言の葉の

色づく秋をたれりいそまし

雑の歌

百濟國博士王仁

難波津よ咲くや木の花冬ごもり

今を春べと咲くや木の花

此の歌の、古今集に見えたる歌にて、其の意の、難波津よ冬ごもりせし木の花も、今の、春となりたりとて咲く事なるが、何と愛でさき事ならずやとの心なり、此の、仁徳天皇の、皇子よて、難波よおとせし時、東宮の宇治稚郎子と申す御方と、互よ、御位を譲りあひ給ひて、三年をも經るよ依りて、其の頃、

百濟國より來居る王仁といふ人、待ちかねて、此の歌を詠みて奉りしなり、此の歌よ、木の花とあるを、古くより、梅なりといへれど、梅よあらず、櫻なりといへる人もある事なるが、實よ、梅よての有るまじく櫻なるべし、木花之佐久夜毘賣と申す御名の木の花も、櫻の事なればなり、さて、兄の、上世の人、上下おしなべて、何事よりも、先づ、天皇の御位をこそ待ちとさりしなちめとて、次の歌を詠みたり、

木の花のさりえん春を世の人と

なにともあらず待ちとさりけん



此の本歌の作者、王仁ワニの、百濟國ヒヤクサイイコクの人よて、應神天皇の十五年といふよ召され  
て参りさる人よて、論語、千字文など携タツサへ來さりし、此の人なり、まよ、此  
の人、久しく來居キさりし故よ、御國の語よも、能く通じ居て、此の難波津ナニハツの  
歌も詠みさるなりといふ、

二二〇

讀人志らず

我が君キミを千代チヨよ八千代ヤチヨよさゞれ石イシの

いとほとなりて苔コケのむすまで

此の歌も、古今集よ見えさる歌よて、和漢朗詠集よ、君キミが代ヨを千代チヨよ八千代ヤチヨ  
よさゞれ石イシのいとほとなりて苔コケのむすまでとあり、まよ、古今六帖よ、我が  
君キミを千代チヨよましませさゞれ石イシのいとほとなりて苔コケのむすまでとあり、歌の意の、  
我が君キミの、千年も幾千年もおもしませ、さゞれ石イシの、巖イハホとなりて、其の巖イハホよ、  
苔コケのむす迄おもしませとの心なり、されば、兄サトの、砂石サシの、巖イハホとなりて、其の  
巖イハホよ、苔コケのむす迄といふも、随分ズキブンの長き年月なれど、年トシを限りさるやうよ覺  
ゆるの、足らぬ心地ココチすればとて、次の如く詠みさり、

我が君キミをこそよましませさゞれ石イシの

いもご成るてふ年をかぎらで

三三

讀人志らず

月夜よし夜よしと人よ告げやらむ

來てふよ似ふり待ふずしもあらず

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意は、今宵の明月なり、此方の、月を見るよ、極めて好しなど告げやらんよ、來よとの言をせずと、來よといふ似て居るよ、まさ、此方の心中よ、待ふぬよても無しとの心なり、來てふ

もの、來といふといふを、約めていへるなり、然れば、兄の、其の告知を聞き、さる人の心よなりて、次の如く詠みたり、

月夜よし夜よしと聞けむ時もおりず

そのすなもちよ訪たまほしけれ

僧正遍昭

他人のこきて立ちよる木の下を

たのむ蔭なく紅葉しまけり

三三

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、木の下よの、何人も立寄る事なれど、侘人の、笠なども無ければ、時雨などは逢へば、みな、木の下は集ひ来るを、今の、秋も晩れ方となりて、侘人の、さむりり頼める木の下も、木の葉、みな散りて、蔭も無くなりさるよ、侘人の、さぞ歎く事ならんとの心なり、兄も、同じ心を詠みさり、

木の葉散る梢あふぎて侘人の

なげらん空ぞときて悲しき

此の本歌の作者、僧正遍昭の、在俗の時の名の、良岑宗貞とて、仁明天皇よ仕

へ奉りさりしよ、天皇崩御ありしりば、悲哀は堪へずして、僧となりさるなり、

読人志らず

いにしへの賤の芋手巻いやしきも

よきもさりりそありしものなり

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、倭文布を織る芋手巻の、賤しき人の着る衣の料の布を織る物なるが、此の倭文布を着るむりりの賤しき者よても、まさ、美服を着る貴き人よても、人と生れ來ての、一度の盛の有りしも

のぞとの心なり、倭文布との、麻布の類よて、文のある物なり、されば、兄の、  
貴きも、賤しきも、盛の有りしものなれば、過ぎし盛を、今よ繰返す習慣もあ  
れよとて、次の如く詠みより、

二二六

榮えけんむりしを今よ芋手巻の

いごくりりへすならひこもがな

讀人志らず

世の中て何り常なる飛鳥河

きのふの淵も今日を瀬よなる

此の歌の、古今集に見えざる歌よて、其の意の、人の世の中といふ物の、常よ、  
變り行くものよて、變らずてある物の、何も無し、飛鳥河を見よ、昨日の、淵  
と見し處も、今日の、瀬と成りて居るよとの心なり、此の歌の、飛鳥の、明日  
を思ひよせざる故よ、昨日、今日とやうよ詠みつゞけより、されば、兄も、そ  
の心よて、次の歌を詠みより、

飛鳥河あすもまゝ見ん昨日今日

二二七

ふちせかそれる水のゆくへを

大伴家持

つるぎ太刀いよ、磨ぐべしいよしへゆ

さやりよおひて来よしその名ぞ

此の歌の、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、劔太刀の磨ぐ物なるが、其の劔太刀を磨ぐやうよ、人の、其の心を磨ぐねばならぬよ、殊よ、大伴氏の、上代より、潔白無垢の名を得て、君よ仕へ來ざる家なれば、名を汚すやうなる事

の、決してありてのならずとの心なり、劔太刀の、一種の太刀にて、劔と太刀とのふたつよのあらず、さて、兄の、大伴氏の此の家訓よ感じて、次の歌を詠みより、

劔太刀磨ぎよ磨ぎよる大伴の

むりしの影をあふぎてぞ見る

讀人志らず

いざいざよ我が世も経なん菅をらや

ふしみの里の荒れまくを惜し

三〇

此の歌の、古今集に見えざる歌にて、其の意の、自身ミツカラの、此の處トコロにて、生涯シヤウカイを送るべし、自身ミツカラの、若し、此の處トコロを離れて、他所トコロへも往りば、此の里サトの家も荒るらんと思へば、惜しき事なる故よ、少しの、心ココロは叶カナはずとも、忍シびて居る事よせんとの心なり、兄も、同じ心を詠みたり、

住スみもてん世ヨよしあらねむいづくよも

こゝろの行ユくよまりてぞ居ヲる

僧正遍昭

折ヲりつれど手房テフサよ汚ケガる立タてながら

みよのほとけは花ハナたてまつる

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の意の、此の花ハナの、佛ホトケよ奉らんと思へど、折ヲりて奉る時の、手テぶさよ汚ケガる、故よ、折ヲらずして、立タちざる儘ままよ奉る事よせりとの心なり、手房テフサとい、手首テヅメの事なり、まさ、三世ミヨの佛ホトケとい、過去クワコ、現在ゲン、未來ミライの佛ホトケをいひて、三世ミヨよ、見よの心をも含フめたり、兄ケイのも、同じ心なれ

三一

ど、佛を、神よかへて詠みより、

おのづうら散りむふ花を神山の

幣ごぞ神を見そなをすらん

大中臣能宣

千年とも數をささめず世の中よ

かぎりなき身と人もいふべく

此の歌の、拾遺集に見えよる歌よて、其の意の、千年といへば、長きの長けれども、數の、定めてのいそず、世の中よ、限りなき人と、人より言とれん爲よ、數を定めぬ方こそ宜しうらめとの心なり、兄のも同じ心なり、

千年とも定めでをあれさざれ石の

いそほごならん時もある世よ

讀人志らす

さうき葉の香をかぐをしみとめ來れむ

### 八十氏人ぞまとるをりける

此の歌の、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、榊葉の香のかうをしき故よ、香をとめて来て見れば、數多の人の團居して居るよとの心なり、八十氏人の、數多の人をいへり、まさ、榊葉の、肉桂とり、櫛とりいふ木の類にて、今ある榊といふ物よのあらずといへり、まさ、此の歌の、神樂歌までもあれば、此の八十氏人の團居の、神祭の時の事なるべし、さて、兄のも、同じ心なり、

さりき葉の香をとめて来て百不足

### 八十氏人の團居をぞ見る

#### 紀貫之

いづづらよ世よある物と高砂の

松もこれをや友と見るらん

此の歌も、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、世の中よの、無くてもよき、無益の物と、高砂の松の思ひて、自身を、松の友のやうよ考へて居る事ならんとの心なり、兄のも、同じ心なり、



いづづらよ年のみつめむ高砂の

松よ此の身もたぐひやせぬ

柿本人麻呂

こぎもこが寐くふれ髪を猿澤の

池の玉藻と見るぞかなしき

此の歌も、拾遺集に見えたる歌よて、其の意ハ、今日、猿澤の池を見れば、

女の、死屍の浮きて居て、其の女の髪ハ、池の中よ生えたる玉藻の如く見えたるガ、悲しき事よてあるよ、誰ガ妻の寝くふれ髪ぞ、不便なる事なりとの心なり、此の歌ハ、人麻呂の、猿澤の池よて、溺死したる女を見て詠みよるなるガ、此の女の采女よて、今も、池の傍よ、采女の墓もある事なり、吾妹子とい、吾ガ妻をいふ事なれど、此よてハ、唯づ、女を親みていへる迄なり、兄の、今、猿澤の池を見て詠みよる歌ハ、次の如し、

猿澤の池も玉藻も見えなくよ

寝くふれ髪を人のいふらん

讀人志らず

君見れむすぶの神ぞうらめしき

つれなき人を何つくりけん

此の歌も、拾遺集に見えざる歌にて、其の意の、其許を見れば、人を造り給ひし産靈神までも恨しく思はるゝよ、何故よ、かゝるつれなき人を作り給ひしぞと申しさくさへなるぞ、夫れよても、猶つれなくてのみ、其許の居らるゝよやとの心なり、産靈神の、人を造り給ふといふ事の、古書にも見えて、上代の、

みな、人も知り居し故よ、此くの詠みさるならんが、今の、さる古事の、知らぬ人のみの世となりさり、兄も、詞をかへて、同じ心を詠みさり、

人つくる神をさへよも恨む哉

戀てふものゝそてしなけれむ

讀人志らず

のぼり行く山の雲居の遠けれむ

日も近くなるものよぞありける

此の歌の、大和物語は見えざる歌よて、比叡山ヒエフヤマよ登る日ヒの、遠くトホやある、いつ頃マりと問ひける人よ、詠みておくりし歌なり、歌の意の、今度コノタビ、自身ミツカラの登りて行りんとする山の、雲クモの居る高き遠き處トホなれば、日ヒの、近く見えてあるよといへるなり、月日ツキヒの日ヒよ、天上ソラの日ヒを含めて詠めるなり、兄ケイのも、同じ心なれど、詞をかへて詠みより、

二三〇

日もヒ近チカくなりぬと聞キけむ登り行ユく

山ヤマも雲居クモイの上ウヘよやあるらん

讀人志らず

ゆふされむ道ミチも見えぬとふる里サトを

もと來コし駒コマよまりせてぞ行ユく

此の歌も、大和物語は見えざる歌よて、其の意の、日暮ヒグレよて、故郷コトサトの道ミチの、見えぬ事なれど、もと乗りて來コる馬ウマのあるよ乗りて、馬ウマの行ユくよまりせて行くよとの心なり、老馬オイトルウマの、道ミチを知るといふ諺コトワザもあり、漢士モロコシよての、昔ムカシ、管仲クワンチュウといひし人の、道ミチの知シられぬ故ユ、馬ウマよ隨シひて行ユきしなどいふ事もあれば、道ミチ

二三一

の案内者アンナイシヤよ、馬をいへるなり、兄のも、同じ心なり、

むりし出でし道も忘れしふる里を

駒のあゆむよまりせてぞ行く

読人志らず

宇治の橋もりなれをしぞ

のいれよと思ふ年の経ぬれぬ

此し歌の、古今集よ見えざる歌よて、其の意の、むりしの、何の人数とも思そ  
ざりし橋守の如き者までも、年の老いゆきての、此の橋守も、まぶ生きて居る  
りなど思もれて、不便と思もるよよとの心なり、ちもやぶるの、宇治よかけて  
いふ枕詞なり、兄も、自身の、今様よ染ますて老いざるを歎きて、次の如く  
詠みたり、

世の中よ古りぬる物を弓も矢も

すてぬ案山子こそれとなりけり

讀人志らず

ある時トキもありのすさびニ憎ニクりりき

なくてぞ人ヒトを戀コヒしりりける

此の歌の意の、人の、生きて居る間の、在るよまりせて、憎く、思ふ事もあれど、亡ウせざりと聞けば、不便フビと思われて、戀コヒしくなる事よとの心なり、世ヨの人情ワザウの、みな、此カくの如くなれば、此の歌の、昔より、世ヨは語り傳へて、源氏物語などよも、此の歌の詞を引ききて書りれざる事なるが、何人ナニヒトの歌よて、何書ナニシよ

あるりといふ事を知りざる人なし、定家卿イサカキヤウなども、歌の出所をと尋ねられされど、知れずして止みざり、名歌の、大抵オウタイ、かゝるものよて、歌よよければ、讀人ヨミヒトの、何人ナニヒトよても妨げなければ、讀人を尋ぬる事もせず、されば、今傳イマツツせれる名歌よの、讀人ヨミヒトしらすといふが、多くあるも、此の故なり、さて、兄の、同じ心を、次の如く詠みより、

ある時トキも氣ケうごく思オモひし人ヒトすらも

亡ナしとし聞キけむおごろりぬる

能因法師

こゝろあらん人よ見せむや津の國の

なにもこゝりの春のけしきを

此の歌の、後拾遺集よ見えざる歌よて、其の意の、物の哀を知らん人よ見せむ  
きものなり、此の難波をよりの春の景色の奈何、心も詞も及む程なれど、物  
の哀を知らぬ人の、見ても、何とも思はずてあるよとの心なり、哀との、總て、  
物よ感ずるをいひ、其の感ずる人を、心ある人ともいへり、されば、兄の、其

の心を少し變へて詠みさり、

浦人よ見てやそ過ぎん津の國の

春をなにそよ有りてふものを

此の本歌の作者、能因法師の、俗の時の名を、橘永愷といふ、遠江守忠望  
の子よて、後冷泉天皇の御代の前後の頃の人なり、此の人、生得、和歌を好み  
しりば、其の頃、歌名よ高りりし藤原長能よ就て、其の弟子となりさり、歌道  
よて、師弟といふ事の出来し、此の能因よ始れりといふ、能因、まさ、或時、  
好事家の帶刀藤原節信といふ人よ逢ひて、好事の物語を聞きしりば、懷中よせ

し錦袋ニシキノフクロより、匏屑カタクズを取出して、此の、往昔ムカシ、長柄橋ナガラバシを造りし時の匏屑カタクズなりとて見せざれば、節信フシノブ、大は悦びて、己オノレも、亦オト、懐中フトコロより、紙カミを包みさる蛙カハヅの干物ヒモノを取出して、此の、井出イデの蛙カハヅなりとて、二人、興キョウ入りてありきといふ、まよ、能因ノウイン、或時イツトキ、伊豫守實綱ヨロカミサネツナよつきて、其の國クニより下りし時、夏ナツのまじめよて、早魃ヒナリの年トシなりしりば、實綱サネツナの、能因ノウインよ勸めて、雨乞アメゴヒの歌を詠ませて、三島明神ミシマノミヤウジンよ奉らしめさりしよ、炎早ヒナリの天ソラ、忽ち搔曇カキクモりて、三日三夜オホアキ、大雨降りつゞきさりといふ、其の歌の、天アマの河苗代水ガハナハシロミヅよせさくぐせあまくぐります神カミならん神カミといふ歌なり、

讀人志らず

### 我が門の板井の清水里とほみ

人し汲まねむ水草おひまけり

此の歌の、古今集に見えさる歌よて、其の意の、我が家の門の板井の清水の、人里ヒトサトの遠くて、汲む人も無ければ、水よの、水草イクラハ生えてあるよとの心なり、板井イタとい、板イタをもて圍カコみさる井なり、さて、兄の、其の水草の、汲む人も無しといふよ、何人の見出ミイでさるよりとの心を詠みさり、

おりとちて汲む人も無き板井よそ

底の水草をたれ見出でけん

讀人志らず

笹の隈檜の隈河よ駒とめて

まどし水かへ影をどに見ん

此の歌も、古今集よ見えよる歌よて、其の意の、我が思ふ人の、今日、大和路

を行くが笹の隈、檜の隈川よ、まをらく、駒を留めて、水よても飼へりし、然らば、其の間よ、影よても見よきものなりとの心なり、笹の隈、檜の隈川、大和よある地名なり、兄の、其の影をどに見んといへるを評して、昔の人の、情の深くてあるを詠みより、

笹の隈檜の隈川よ影をさへ

むろしそ人のあさりしものを



山邊赤人

玉島のこの河かみよ家もあれど

君をやさしみあらそさずありき

此の歌の、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、自身の家、肥前の、此の玉島川の河上よの在れど、自身、賤の女の事よて、家とても、名をりりの如くなれば、羞しさよ、知らず顔よて、其處とも告げずてありし事よとの心なり、やさしとの、羞しきをいふ、然れば、兄も、其の心を詠みより。

家もあれど何しり告げん玉島の

河のながれて寄るべなき身を

山上憶良

きつづまき數よもあらぬ身よもあれど

千年よもがとおもほゆるかも

此の歌も、萬葉集よ見えざる歌よて、其の意の、自身、人の數よも入らぬを

りりの、極めて賤しき身よてのあれど、然れども、自身の心中よの、此の身の、  
長生して、千年も存らへよしと、思ひて居るよとの心なり、倭文手卷の、數よ  
かけていふ枕詞なり、其のかくる心の、倭文手卷とて、倭文布を織る芋手卷  
の、數も、多くある物なれば、數よかけていふ事なり、兄のも、同じ心なれど、  
兄の、人の願ふ事の、貴賤よて異なる事も有るべけれど、身の賤しければと  
て、願望の無き事のあらずとの心を詠みより、

倭文手卷いやしき身よもほごくの

ねがひの數の無くてやそあらぬ

此の本歌の作者、山上憶良の、元正天皇の御代の頃の人よて、伯耆守などよも  
なりし人なり、此の人、和歌の上手よて、其の名、高く聞えてあり、

山上憶良

遠津人松浦佐用姫つまごひよ

領巾ふりしより負へる山の名

此の歌の、萬葉集よ見えよる歌よて、其の意の、此の肥前の領巾振山の、遠き  
昔の世よ、松浦佐用姫といふ女性の、夫の、三韓よ赴く別を惜みて、山よ登り

て、夫の乗りさる船を望みて、領巾を振りて招きし事ありしより、此の山をも、領巾振山と名づけさるなりといふ心なり、遠津人といひ、大むらしの人といふ義にて、領巾といひ、其の頃の女性の領は懸けて、肩の邊の飾とせし物なり、兄の、歌の詞をかへて詠めり、

佐用姫のむらし思へむ今もなほ

おもろげまたつ領巾ふるの山

此の佐用姫の、領巾を振りて招きしりど、夫も歸り來ざりしりば、思ひ焦れて、其の儘よ、其の山よて、石と成りさりとはいへるが、漢土よても、望夫石といふ

があれバ、さる事の、全く無きよても有らざるべし、

讀人志らず

眞金ふく吉備の中山帯よせる

細谷川の音のさやけさ

此の歌の、古今集よ見えさる歌よて、其の意の、吉備の中山を、帯の如く巻きて、流れて居る細谷川の水の音の清らなる事よとの心なり、眞金といひ、黒金の事よて、吉備國の、鐵の出づる地なればいへるなり、兄の、吉備の中山の知

らねども、此の歌よて、音は高く聞きてありとの心を詠みさり、

眞金マカネふく吉備キヒの中山ナカヤマ越えねごも

細谷川ホソタニガハのおごよ聞きつゝ

讀人志らず

美濃ミノの國關クニセキの藤河フチガハ絶えずして

君キミよつりへんよろづ代ヨまでよ

此の歌も、古今集に見えさる歌よて、其の意の、美濃國の關の藤河の、流れも絶えぬが、其の流れの絶えぬが如く、萬代ヨロツヨまでも、絶ゆる事なく、君よ仕へんとの心なり、兄の、少し、心をかへて、關の藤河の、假令オトヒ、其の流れの絶ゆる事ありとも、君の御代ミコトの、常磐堅磐トキハカキハなれば、いつ迄も絶ゆる事なしとの心を詠みさり、

美濃ミノの國關クニセキの藤河フチガハ絶えぬごも

絶えめや御代ミコトをこここそよして

讀人志らず

御さぶらひ御笠と申せ宮城野の

木の下露を雨よまさされり

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、御供の人さちの、早く、御笠と申上げよ、此の宮城野の木の下露の、雨よりも多く降るのとの心なり、兄の、宮城野の景色のみを詠みさり、

宮城野の木の下露は秋萩の

花ずりごろも色へてぞ着る

讀人志らず

陸奥をいづくをあれど鹽がまの

浦こぐ舟のつな手かなしも

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、陸奥よの、何處よも、名所のあれど、鹽釜の浦を漕ぐ舟の綱手引く状が、何となく、深く、心よしみごとくとして覺ゆるぞとの心なり、哀しとの、心よ、深くしみて覺ゆるをいふ、さて、

兄の、鹽釜シホガマといふ語の縁エシは依りて、辛カラき世とさりを思ひそへて詠みより、

鹽釜シホガマの浦ウラこく船フネは辛カラき世ヨを

うみとさり行く程ホドぞ志ココロらるゝ

讀人志ココロらず

最上川モトガハのぼれむくさる稲舟イナフネの

いなまをあらずこの月ツキむりり

此の歌も、古今集に見えさる歌にて、其の意は、最上川モトガハを上下ノボリクダリする稲舟イナフネの、いなといふ言コトバのやうよ、否イナといふよのあらねど、此の月ツキのみは、思ふやうよの爲ためられずとの心なり、最上川モトガハは、羽前ウゼシにある河にて、稲舟イナフネは、稲イネを刈カりて積ツみさる舟なり、されば、兄の、其の稻イネといふ言コトバは、後世コウセイの事コトは、善惡ヨシアシともよえいそぬ事のみが多くあるよとの心を詠みより、

最上川モトガハながれての世ヨを稲舟イナフネの

いなせえいそぬ事コトのみぞ多オホき

藤原兼輔

人の親のこゝろを闇ヤミふあらねども

子をおもふ道ミチふ惑マドひぬるかな

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の意の、人の親の心の、闇といふよりあらねど、子の上を思ひて、兎やせん角やせんと思ひ惑ふ事にてあるよとの心なり、兄も、同じ心にて、二首を詠みたり、

子の上を思ふこゝろの闇路ヤミヂよそ

まごそめ親オヤをあらじこそ思オモふ

子を思オモふ心の闇ヤミをたごりつゝ

親オヤをつひよぞ老オひそてぬべき

此の本歌の作者、藤原兼輔の、左近衛中将利基の六男にて、醍醐天皇の御代の頃の人なり、賀茂川の堤ツツミに家居して在りければ、堤中納言とも稱せられりと  
いふ、

讀人志らず

家人イヘドトを歸りカヘもや來コといもひ島ジマ

いもひ待マつらん旅行タビユくこれを

此の歌の、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、今度コノタビ、自身ミツカラの、旅タビは出でよつを、家内イヘの者どももの、無事ムジにて、疾トく歸れと、祝島イヒシマの神カミを祝イハひ奉りて、待ちて居る事ならん、何ナニとぞ、神の御加護オンカゴを得て、無事ムジは歸りて、家内イヘの者どもをも悦ウレませよきものよとの心なり、祝島イヒシマの、周防國スハウクニにある島なり、祝イハふとい、神を

祭る事なり、さて、兄イヒの、祝島イヒシマの神カミを祭ると、其の靈驗シメシのある事を詠みより、

祝島イヒシマいもひて待マてむ草クサまくら

旅行タビユく人もつゝがなしこいふ

若麻績部諸人

庭中ニハナカのあすもの神カミは小柴コシバさし

あれをいもゝん歸りカヘ來クまでよ



此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、人家の庭中ヒトノイヘニハナカに祭りてある、阿須波アスハの神の、旅行ツリユクく人を守り給ふと聞けば、我の、人家ヒトノイヘは往く毎ツルは、小柴コシメを、其の神前カミマタに挿ササして歸り來んまで、旅中の無事を祈る事とせんとの心なり、上代ウヘノヨの、人家ヒトノイヘよの、みな、阿須波アスハの神を祀りマツルする事なりといふ、今、人家ヒトノイヘよ、能く、稻荷イナリの神を祀れるマツルがあるの、阿須波アスハの神を祀りマツルするが、自らオノツカ、稻荷イナリの神を祀る事マツルよなりするなるべし、さて、兄の、家イヘは留守して待つ人の心よなりて、次の如く詠みより、

今日ケフこそあれ明けむ歸れカヘと小柴コシメさし

阿須波アスハの神をいもひてぞ待つ

此の本歌の作者、若麻績部諸人ワカフミベノモロトの、其の傳記詳ツマビらりならず、

讀人志らず

無ナき名ナぞと人ヒトよもいひて有アりなまし

こゝろの問トをいりイこふへん

此の歌の、後撰集に見えざる歌にて、其の心の、人ヒトより問トそれんよの、無ナき名ナ

なり、無き事なりなど、答へても有るべきなれど、若し、自身の心より問われんよ、何と答ふる事ならん、人よ、いりよも答ふべし、自身の心よ、實事を虚事とも答へらるまじきぞとの意なり、兄のも、同じ心なり、

二六〇

心こそころの問ひも答へなめ

有るを無しこそ人よいふごも

三位國章

音よ聞くこまのこふりの瓜つくり

となりかくなりなるこころかな

此の歌の、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、山城の狗といふ處の、瓜の名所よて、音よも聞えたる處なるが、その瓜作の如く、人の、瓜の、右よなり、左よなれるが如く、世の中よ在りての、時と地とは随ひて、あれやこれやよなる事よとの心なり、兄も、同じ心を詠めり、

世よ経れむこなりかくなる山城の

こまの瓜生をまなびやせせぬ

二六一

此の本歌の作者、三位國章サニキタニキラといふ人の、傳記もおぼろげよて、未だ考へ得ず、

二六二

讀人志らず

手テまぐらの透スキマ間の風カゼも寒サムりりき

身ミをならそしのものよぞありけり

此の歌も、拾遺集に見えたる歌よて、其の意の、手テを枕マクラとして寝イネる時の透スキマ間の風カゼも、寒サムく覺えたる事のありしが、人の身ミの、何事ナニゴトも習慣ナラハシよて、馴ナるれば、馴ナれて、然サむりりよの思オモひものよとの心ココロなり、兄ケイのも、同じ心ココロなり、

手テ枕マクラのすさ間の風カゼを身ミよまめて

世ヨのならそしをおもひこそやれ

讀人志らず

近江オホミより朝アサたち來クれむうねの野ノよ

田鶴タヅぞ鳴ナくなる明アけぬこの夜ヨを

此の歌の、古今集に見えたる歌よて、其の意の、近江オホミより、今朝ケサ、まど暗クラき夜ヨ

二六三

の中ウチは發タちて來キるよ、宇禰野ウネノは來キれば、田鶴タヅの聲コエの聞キゆるの、さての、夜も  
明けアケるぞとの心ココロなり、兄ケイも、同じ心ココロを詠ヒトみより、

近江路アツミチの明アけゆく空ソラを田鶴タヅが音ネの

聲コエよや人ヒトの聞キきことコトるらん

讀人ヨミ志シらず

水ミヅぐきの岡オカのやがふイモ妹イモとこれと

寐ネてのあさげの霜シモの降フりをも

此の歌も、古今集コキンシュに見えミる歌ウタにて、其の意イの、昨夜ヨベの、妻ウメと二人フタリして寝イねるよ、然サむりり寒サムりりきとも覺サえざりしよ、今朝アサ起きて見ミれば、一面イチメンよ、霜シモの降フりてあるの、さての、昨夜ヨベの寒サムりりしならんが、自身ミツカラの、二人フタリして寝イねる故ユヘよ、其の寒サムさの、知チらずてありしよとの心ココロなり、兄ケイのも、同じ心ココロなり、

片カタまきて一人ヒトリし寝ネねむ水莖ミヅグキの

をりの霜シモよぞおごろりれぬる

読人志らず

我が庵イホを三輪ミワの山本ヤマモト戀コヒしくむ

とぶらひ來キませ杉立スギタテてる門カド

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意の、自身ミツカラの庵イホの、大和ヤマトの三輪ミワの山本ヤマモトなり、若し戀コヒしとならば訪トブラひ來キられよ、杉スギの立タテてる門カドの、自身ミツカラの家イヘなりとの心ココロなり、兄ケイの、其の庵イホを訪トふ人の心ココロなりて、次の如く詠みより、

杉立スギタテてる門カドあまゝあり指サして行ユく

老るしむいづら三輪ミワの山本ヤマモト

良岑 宗貞

佗人ワレヒトの住スむべき宿ヤドと見るなべよ

なげきくたゝる琴コトの音ネぞする

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意の、佗人ワレヒトの住スむべき家イヘと見えて、荒アれそてゐる家イヘのあるぞと、見るよつけて、歎ナガきを添ツふるが如ごとき琴コトの音ネの聞キえて來キたるの心ココロなり、さて、此の歌の、宗貞ムネサダの、奈良ナラへ赴オモムく道ミチよて、荒アれよ

ち家よ、女の琴ひきけるを聞きて、此の歌を書きて、其の家よ入れさるなり、  
加むるとい、在るが上よ、まゝ添むるをいふ、兄の、宗貞の風流なるを詠みさ  
り、

侘人のなげきくも、る琴の音よ

行きもやられず立てる人たれ

讀人志らず

風の上よありりさゝめぬ塵の身も

ゆくへも志らずなりぬべらなり

此の歌も、古今集よ見えさる歌よて、其の意の、風は吹りれて飛びまがふ、塵  
の如き身の、終よの、其の行方も見失ふやうなるが、人の身といふ物の、さてさ  
てむりなき物なりとの心なり、此の歌の、もと、陶淵明の詩よ、人身無三根蒂、  
飄如陌上塵」といふがあるより詠みさる歌なり、兄のも、同じ心なり、

風のうへよ漂ふ塵の人の身も

あごせりもなくなりぬこそ聞く

讀人志らず

ふもとゆふ葛城山は降る雪の

間なく時なくおもほゆるかな

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意ハ、大和の葛城山ハ、冬よなれば、雪の降らぬ間も無きガ、其の降らぬ間も無きやうよ、絶えず、其の人の事の思もるよよとの心なり、兄も、同じ心を詠みたり、

世は経れむあふささるさよ葛城の

雪の時なきものおもひぞする

讀人志らず

いにしへの野中の清水ぬるけれど

もとのこゝろを知る人ぞくむ

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意ハ、むらしの野中の清水ハ、今のぬるみて、汲む人とても無けれども、昔の事を忘れずて居る人の、今も、なほ

汲みてある事よ、今の世の人、大抵、新しき方のみよつきて、古き昔の事  
などの、忘れられてあるが、さて、情も無きものよてあるよとの心なり、然  
れば、兄、猶、今の世の人の心をいふとて、次の如く詠みより、

いにしへの野中の清水くむ人の

影さへ見えぬ世よこそありけれ

讀人志らず

今こそあれこれもむりしと男山

さりゆく時もあり來しものを

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意、自身も、今こそ、此く老いと  
てされど、昔の榮えたる時節も有りしを、さて、年老いぬれば、顧みる人も  
無くなりし、残念なる事よとの心なり、男山の、岩清水の御社よて、社前  
の、御坂もあれば、さりゆくとの詠めるなり、さりゆくとの、榮え行くよて、  
勢力のあるをいへり、然れば、兄、老人の、此の歎息を聞きて、老人とても、  
昔より、老人よ生れしよのあらぬよとの心を詠みより、



ふる人<sup>ヒト</sup>と名<sup>ナ</sup>よこそ負<sup>オ</sup>へれ昔<sup>ムカシ</sup>より

老<sup>オ</sup>いてうまれしこれならなくよ

讀人<sup>トクニ</sup>志<sup>シ</sup>らず

世<sup>ヨ</sup>の中<sup>ナカ</sup>は舊<sup>フル</sup>りぬる物<sup>モノ</sup>を津<sup>ツ</sup>の國<sup>クニ</sup>の

なから<sup>ナ</sup>の橋<sup>ハシ</sup>とこれとなりけり

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意は、世の中は、次第は新しくなり

て行くが、今の、此の世の中にて、舊き物として、津の國の名柄の橋と自身と  
よて、外よの、ふるき物として見えぬやうなるよとの心なり、然れば、兄も、  
同じ心を詠みより、

我<sup>ワレ</sup>のみご思<sup>オモ</sup>ひしものを高砂<sup>タカサゴ</sup>の

松<sup>マツ</sup>もむらしを語<sup>カタ</sup>りがほなり

讀人<sup>トクニ</sup>志<sup>シ</sup>らず

大<sup>オホ</sup>あらしきの森<sup>モリ</sup>の下<sup>シタ</sup>草<sup>クサ</sup>老<sup>オ</sup>いぬれむ

駒もすすさめず刈る人も無し

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意ハ、山城の名所なる、大荒木の森の下草も、春の頃の、人も刈られ、駒も賞玩せられてありしを、春過ぎ、夏晩れて、古くなると、刈る人も無ければ、食む駒も無くなるよ、人も、亦さ同じやうよて、若き時の、愛せられもし、泣りれもせしを、此く、自身のやうも、若き時が第一なり、哀れなる事よとの心なり、兄も、同じ心を詠みて、老を歎きさり。

老いぬれむ何りかたらん大荒木の

森の草さへあそれこそ思ふ

讀人志らず

おしてゐるや難波の三津は焼く鹽の

からくもこれぞ老いよげるかな

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意ハ、自身も、此の年頃、世の艱難

辛苦<sup>シツク</sup>を嘗<sup>ナ</sup>めて来て、辛<sup>カラ</sup>じて、無事<sup>ムジ</sup>よて老い<sup>コ</sup>ふるが、世の中といふもの、苦<sup>ク</sup>しきものよとの心なり、おしてゐるや、難波<sup>ナニハ</sup>の枕詞<sup>マクラコトバ</sup>、三津<sup>ミツ</sup>の、難波<sup>ナニハ</sup>の地名<sup>トコロナ</sup>よて、此の地<sup>トコロ</sup>よて、鹽<sup>シホ</sup>を焼<sup>ヤ</sup>く故<sup>ユ</sup>よ、其の鹽<sup>シホ</sup>の辛<sup>カラ</sup>きが如く、辛<sup>カラ</sup>くして老い<sup>コ</sup>ふるを詠<sup>ユ</sup>みしなり、兄<sup>ケイ</sup>も、亦<sup>モ</sup>さ、其の身の老い<sup>コ</sup>ふるをいふとて、次の如く詠<sup>ユ</sup>みたり、

言葉<sup>コトノハ</sup>の志<sup>シ</sup>げみよ入りて敷島<sup>シキシマ</sup>の

道<sup>ミチ</sup>よやこれぞ老い<sup>コ</sup>んごすらん

藤原興風

たれをりも知る人<sup>ヒト</sup>よせん高砂<sup>タカサゴ</sup>の

松<sup>マツ</sup>もむりし<sup>トモ</sup>の友<sup>トモ</sup>ならなくよ

此の歌も、古今集に見えざる歌よて、其の意、自身<sup>ミツカラ</sup>のやうよ老いて、知る人も無くなり、今の、誰<sup>タレ</sup>を友<sup>トモ</sup>とすべきり、高砂<sup>タカサゴ</sup>の松<sup>マツ</sup>とても、昔<sup>ムカシ</sup>の友<sup>トモ</sup>よて無けれど、人も無ければ、松<sup>マツ</sup>よてもすべきり、さて、自身<sup>ミツカラ</sup>も老い<sup>コ</sup>ふる事よとの心なり、兄<sup>ケイ</sup>のもの、同じ心なり、

老いぬれむ知る人をなみ高砂の

松をのみこそうちかこちけれ

此の本歌の作者藤原興風の醍醐天皇の御代の頃の人にて、下總權大掾など  
まなりし人なり、天書など書きし濱成の孫なりといへり、

讀人志らず

難波潟汐みち來らしあま衣

田蓑の島は田鶴鳴きことふる

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意は、難波の干潟は、汐が満ちて來  
るらし、干潟は居し鶴どもが、田蓑の島の方へ鳴きて渡れるよとの心なり、  
爾衣の、田蓑よかけていふ枕詞なり、兄も、同じ心を詠みたり、

難波が汐干を告げて鳴きぬなり

田蓑の島の田鶴のもろ聲

壬生忠岑

住みよしと蚤を告ぐとも長居すな

人こそすれ草生ふといふなり

此の歌も、古今集に見えよる歌よて、其の意の、住吉とて、人の住むよの好き  
地なりと、其の地の蟹などの告ぐるならんが、住吉の濱よの、忘草といふ草も  
生ゆとの事なれば、人を忘るゝやうの事よてもあらば、夫れこそ大變なれば、  
假令往りるとも、長居のせずて、直よ歸りてくれよとの心なり、忘草といふ、今  
の萱草の事なり、然れば、兄の、少し、心をかへて詠みさり、

憂き事を忘れん草も生ふといへむ

世を住みよしと人のいふらん

紀貫之

雨よ依り田蓑の島を今日行けむ

名よそかくれぬ物よぞありける

此の歌も、古今集に見えよる歌よて、其の意の、田蓑の島といへば、雨降りて  
も、濡るゝ事も有るまじと思ひて、雨中よ、今日行きて見よるよ、雨よ濡れよ  
あ、然れば、田蓑の名よての、雨を避くる事の、出来まじと思はるとの心なり

兄のと同じ心なり、

雨降れむ濡れなんものぞ津の國の

田蓑も島の名よこそありけれ

惟喬親王

まら雲の絶えず棚引く峯よどに

住めぞすみぬる世よこそありけれ

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意は、雲の、常は棚引きてある山の峰までも、住所として住める時の、何とてして住まると世なり、都ならで、住まれずとり、人里ならで居られずなど言ひ思ふは、人の習慣にて、然り思ふ事なるよとの心なり、然れば、兄も、其の心を詠みたり、

野も山も住めむすみぬる世の中を

何り憂しこそ人のいふらん

此の本歌の作者、惟喬親王は、文徳天皇、第一の皇子にて、詩歌をも善くし給ひし間、天皇よも、皇太子よと思ひ給ひたりしりど、藤原良房を憚らせ給ひて

得果し給とざりしりば、親王よも、小野の里は隠れ住み給ひさり、されば、在原業平朝臣の、常よ、小野は参りて慰め聞えし事なり、

讀人志らず

誰が身そぎ木棉つけ鳥りからころも

たつ田の山よをりもへて鳴く

此の歌も、古今集に見えさる歌よて、其の意の、誰が襖をして放ちさるり、木棉につけさる雞の、立田の山よ、長く鳴きて居るのとの心なり、雞よ、木

棉を着けて放つ事、四境の祭よもあれば、襖も放ちしなるべし、木棉といひ、白き麻布の如き布よて、上代の、何事よも、此の布を用ひしなり、唐衣の、たつよ懸くる枕詞よて、をりもへての、時久しきをいふ、兄の、唯、木棉を着けさる雞を詠みさり、

世の中を思ひかねてや神垣よ

木棉つけ鳥も鳴き渡るらん

讀人志らず

世に經れむ言の葉まげき吳竹の

うきふし毎ようぐひすの鳴く

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意は、鶯の、竹藪は鳴きて居るが、自身も、世の中は在れば、朝夕、何くれの事よつきて、人言を聞くが、其の憂き事を聞く毎よの、鶯のやうに泣きて居るよとの心なり、吳竹といふ、唯、竹といふは同じ、まさ、言の葉、憂き節の、葉、節など、竹をいふ縁より

ていへるなり、兄も、同じ心を詠みたり、

侘人のとび居る時も吳竹の

世をうぐひすの鳴くぬ日ぞなき

讀人志らず

思ふどちまとるせる夜も韓にしき

たまく惜しきものよぞありける



此の歌も、古今集に見えざる歌よて、其の意の、親しき友ごちの集ひざる夜に、心の行く事もありて、種々の面白き物語などもすれば、其の團居の席を退きて歸るの、残念なるものなるよとの心なり、韓錦の、裁ちて物とする故よ、たつといふ言の枕詞よ用ひ、まさ、韓錦の、見事なる物なれば、裁つよ惜まるゝ心をも含めさり、さて、兄の、其の團居の興をいそんとて、次の如く詠みよ

二九〇

思ふごち團居せる夜を宵ながら

明けぬごかこつ時もありけり

讀人志らず

嬉しきを何よつゝまん韓ころも

たもとゆふりよ裁てといをましを

此の歌も、古今集に見えざる歌よて、其の意の、此の嬉しき心の、何よ包むべきり、袂よても、ゆふりよ裁ちて、大きく拵へよと言そんと思ふぞとの心なり、韓ころもとい、唯ぞ、衣といふよ同じ、兄も、詞をかへて、同じ心を詠みよ

二九一

嬉しき袖よあまりて見ゆめるを

たもごさへこそ狭く裁ちけれ

讀人志らず

むらさきの一本ゆゑは武藏野の

草をみなながらあそれとぞ見る

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意は、紫草にて染めたる色のなつり

しきは、其のなつりしき色を染むる紫草といふ草は、武藏野に生ゆる故は、此の  
一草の爲は、武藏野の總べての草をも、憐れなる物を見るよとの心なり、兄  
も、同じ心を、詞をかへて詠みたり、

武藏野の草をみながら露けきを

たれむらさきを植ゑそめよけん

讀人志らず

月夜よも來ぬ人待ふる搔曇り

雨も降らなん侘びつゝも寐ん

此の歌も、古今集よ見えざる歌よて、其の意の、今宵の如く、月の明き夜の、來ぬ人と知りても、明月よ乗じて、來いせぬりなど思われて、寝られもせぬが、待ちても來られぬものならば、一天搔曇りて、雨よても降りてくるればよきよ、然る時の、戀しき心を抑へて、侘びながらも寝んものを、あやにくなる明月よ

この心なり、されば、兄も、同じ心よ、待つ人を詠みより、

月夜よし夜よしと思ふこゝろより

人まつむしの音をのみぞ鳴く

讀人志らず

流れても妹背の山の中よおつる

吉野の河のよしや世の中

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、妹背山イモヤヤマの間アヒダも、吉野川ヨシノガハといふがありて、其の間アヒダを隔て、在るが、人の上も、其れと同じ事にて、其の當時トシツキのさもなけれど、年月トシツキの流れて行く間マヒの、人言ヒトゴトも出来て、竟ツヒの、種々クサクサの隔ヘダても起る事なれど、其れは、世の性なり、隔ヘダてらるれば、それ迄の事よとの心なり、兄の、心をかへて、妹背山イモヤヤマの間アヒダの河を、吉野川ヨシノガハといふ事を詠みより、

妹山イモヤマも背山セヤマも觸る、河カハなれむ

中ナカをよし野ノこ人のいふらん

紀貫之

君キミまさで煙ケブリ絶えよし塩シホがまの

うらさびしくも見えこふるかな

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、河原院カハラノイサンの、融公トホルコウウの別荘ベツサウなるが、融公トホルコウウ亡せて後の、庭園ニハの景色ケシキは設マウけられざる塩釜シホガマの煙ケブリも絶えて、浦ウラの眺望ナガメも、物淋モノサビしくなりさるよとの心なり、うら淋サビしとの、心淋ココロサビしきをいふ、兄も、同じ心を詠めり、

君まさで絶えし煙を鹽釜の

さびしき影を立つるなりけり

讀人志らず

かふみこそ今もあふなれこれ無くむ

こするゝ時もあらましものを

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意の、記念といふ物の、其の時の、

然までの思もざりしりど、今思へば、仇となる物なり、此の物よても無りりし  
ならば、自然は忘るゝ事もあらんよ、此の物の有るが爲よ、忘るゝ事の出来ず  
して、其の物を見る度よ、其の人を思ひ出で、侘しく思ふ事よとの心なり、  
さて、兄の、記念を仇なりと爲すして詠みさり、

仇なりさいへむこそいへ別路よ

この記念さへ無りらましりむ

素性法師

濡れてほす山路の菊の露の間よ

いつり千年をこれを経よけん

此の歌も、古今集に見えざる歌まで、其の意の、山路を行けば、露も濡るゝを、其の濡れざる衣を乾らす、僅りの間よ、千年を経ざるの、何故ならんりと  
の心なり、此の、諸越、晋の代よ、王質といふ人、山に入りて、木を伐りて居  
ざるよ、碁を打つ人のあるを見て、傍よ寄りて、其の圍碁を見て在りしよ、圍

碁も竟てされば、さらば歸らんとて、側よ置きざる斧を取らんとせしよ、斧の  
柄の朽ちてありしよを、大きよ驚きて、家居の方へと行きて、家を尋ねれ  
ども、家もなく、知る人とても無りしりば、王質の事を問へば、上代よ、さ  
る人ありて、山に入りしよ、入りし儘まで歸り來ずと聞き傳へりとの事よて、  
再び驚きて、終よ、行方も知れずなりきといふ故事のあればなり、さて、兄の、  
王質の事を詠みより、

露の間よ千年経といふ山なれむ

うべ斧の柄も朽ちてよけん

讀人志らず

雪降りて年の暮れぬる時よこそ

つひよもみぢぬ松も見えけれ

此の歌も、古今集に見えたる歌にて、其の意の、松なども、夏の、雑木よまじりて、何の趣も無けれども、雪降りて、年も晚れんとする時よの、雑木どもい、木の葉、みな紅葉ともなり、落葉ともなるよ、松のみい、夏の景色にて、色も變らで立てる事が知らるなり、人も、其の如くよて、平生の、何といふ

事もなく見ゆる人の、世の艱難などよ遭ひて、そじめて、其の人の、尋常ならぬなども知らる事あり、何よても、事よ當らねば、現それぬものぞとの心なり、兄も、同じ心を詠みより、

大方の木オホカタの葉ハ散りチまユく冬山フユヤマを

よそげよ見ても立てる松かな

素性法師

よろづ代を松よぞ君をいもひつる

千年の蔭よすまんとおもへば

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、君の御代を、常磐なる松よか  
けて、萬代もと祝ひ申すの、君を、萬代も坐せと祝ひて、自身も、其の御蔭よ  
寄りて、千年を経んと思ひてなりとの心なり、兄の、自身の事を除きて、君の  
事のみを詠みたり、

よろづ代に君をいそへむ高砂の

松の千年を物ならなくよ

紀貫之

こりれてふ事を色よもあらなくよ

こゝろよまみてこびしりるらん

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、離別といふ事、物よ染む色  
といふ物よても無けれど、何故り、心よまみて、物悲しくなるよとの心なり、  
兄も、まさ、離別の情を詠みたり、

こりれ路のちのなげきを事なくて



歸り來ませの一言は聞く

紀貫之

掬ぶ手のまづくは濁る山の井の

ありでも人よとりぬるかな

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、人は別るゝよ、飽きて別るゝなれば、何事も無けれど、飽りずして、今、まをらくよても居よりしと思ふ人は別るゝの、侘しくつらき事なるよ、今の、其の侘しくつらき別れをする事よ

との心なり、上句の、すべて、下句のありでといふ言をいそんとて、枕詞の如くは、序としていへるなり、其の故の、兩手をもて、山の井の水を掬ひあぐれば、其の手より滴る雫にて、水も濁りて、飽く迄の飲まれぬ如く、飽りずして別るゝ事よとて、滴る雫よ、水の垢の浮ぶもあれば、垢と飽とを兼ねてもいへるなり、されば、兄も、同じ心を詠みより、

憂き事を何そあれども別路は

ありでこいふぞかなしうりける

藤原兼輔

夕月夜おぼつりなききを玉くしげ

二見の浦をあげてこそ見め

此の歌も、古今集に見えたる歌よて、其の意の、二見の浦を見んよの、夜あけてりらよて宜し、夕月の影よてい、おぼつりなくて、能くも見えぬよとの心なり、玉櫛笥とい、玉よて飾りたる櫛の笥なるが、笥よの、蓋も、身もある物なれば、二見の枕詞としていへるなり、まさ、あけてといふも、笥の蓋の、あ

くる物なれば、笥の縁語としていへるなり、兄のも、同じ心なり、

玉櫛笥ふよみの浦をよるもあれご

朝日を明けてのちよこそ見め

九河内躬恒

かくむりり惜しと思ふ夜をいふづらよ

寝て明りすらん人さへぞ憂き

此の歌も、古今集に見えざる歌にて、其の意の、今宵の、夜の景色も好くて、誰ぞ来て見ぬりと思はるゝ程の夜なるを、何の心も無き人ごちの、惜しと思ふ心も無くて、唯だ、いさづら寝て明りすりと思へば、此の夜を惜む心よりの、まゝ、憂き事は思はるゝぞとの心なり、さへとい、物事の、二つ重りてある時よいふ辭なり、兄の、その惜しき夜の状を、次の如く詠みたり、

まごりなる月も出でゝるあゝら夜を

いでやいりにといふ人のなき

柿本人麻呂

ひんがしの野まかげろふのたつ見えて

かへりみすれを月かぶぶきぬ

此の歌の、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、此の野の、限りも無く廣き野なるよ、東方の野の末よ、朝日の出でんとして、陽燄の發てるが見えざる故よ、振りりへりて、後の方を見れば、有明の月の、西方の空は傾きてあるよとの心なり、兄も、詞をかへて、其の心を詠めり、

入方の月をそがひよかげろふの

たちまふ空を仰ぎてぞ見る

山上憶良

をのこやもむなしりるべき萬代よ

語りつぐべき名を立ふずして

此の歌も、萬葉集に見えたる歌にて、其の意の、男子と生れて來ての、萬世よ

語りつぐ名も残さずての、居らるべきよあらぬを、爲す事も無くて、空しく死ぬといふの、奈何も残念なる事ならずやとの心なり、兄も、同じ心を詠みたり、

せめて世よ名をどにのこせ塵の身も

風よのみやをまよりせむつべき

土師宿禰道良

ぬぞふまの夜をふげぬらし玉くしげ

ふふりみ山よ月かふぶきぬ

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、今宵も、ももや更けて、夜中も過ぎたりと覺ゆるぞ、此の二上山よ、月も傾きて見えてあるの心の心なり、二上山の、越中よもあれど、此よ詠めるの、大和よある山なるべし、兄の、山をいとずして、唯ぞ、深夜の状を詠みたり、

雁鳴きて月のかさぶく大空よ

星ぞかゞやく夜やふけぬらし

大伴家持

すめろぎの御代さりえんと吾妻なる

陸奥山よ黄金花咲く

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、天皇の御代の榮えまさん驗としてこそ、東方の陸奥の山よの、珍しく、黄金といふ物の、花の咲きさる如くよて出でさるならめといふ心なり、此の、聖武天皇の御時、とじて、陸奥より、黄金出でさりとて献りし事ありし故なり、兄も、同じ心を、詞をかへて

詠みさり、

大君を神よしませむ陸奥の

山よ黄金の花を咲らせし

山口忌寸若麿

周防なる岩國山を越えん日と

手向よくせよ荒きその道

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、周防の岩國の山、荒々しき山なれば、其の山を越えん時の、峠の神よ、能く、手向の幣を奉りて、無事よてあらん事を祈れとの心なり、いにしへの、旅行する人の、幣の料の小切を、袋に入れて、峠に到る毎よ、そこにて、幣を散らして、峠の神を祭る事なり、古の人の、今人の如く、敬神くと、口よの言とねど、其の行状の、神國の人なりと思はるゝ事なり、兄の、少し、詞をかへて詠みさり、

手向して歸れるたれり周防なる

岩國山の道をかさりし

此の本歌の作者、山口忌寸若麿の詳らりならねど、漢土より歸化せし人の子孫なりともいへり、

三二八

船王

眉のごと雲居に見ゆるあその山

かけて漕ぐ船とまりあらずも

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意は、阿波の山の、雲居をるりよ、女の眉を引きさるる如く、尾を曳きて見ゆるが、其の山の方を、心よかけて漕ぎ。

行く業の、いづくよ泊てんとするより、泊てんとする處も知られず見ゆるよとの心なり、眉といへるの、女の、眉を、遠山は畫くなどいふ事もあればなり、まゝ、雲居といひ、雲の發ちてある處をいへり、然れば、兄の、其の雲居といふ語は縁みて、空の海といひ詠めるなり、

眉のごと山も雲井に見ゆめれむ

空の海をや船も漕ぐらん

此の本歌の作者、船王の、舍人親王の御子なり、孝謙天皇の御時、藤原惠美仲麿の謀反と與りて、隱岐に流され給ひたり、

三二九

讀人志らず

まさきくしてまふかへり見んますらをの

手は巻きもさる鞆の浦回を

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意ハ、鞆の浦の景色ハ、えもいとぬ  
景色なれば、恙なくして、再び見さき心地するよとの心なり、鞆の浦ハ、備後  
に在る地名にて、浦回といふハ、海邊の廻りをいふ、まふ、ますらをの手は巻  
きもさるといふハ、鞆ハ、壯士の、弓を射る時、手は巻きつくる物なれば、鞆

をいそんが爲よ、枕詞の如く、序としていへるなり、兄も、詞のかそれど、  
同じ心なり、

益荒雄の手は巻くといふ鞆の浦

たれり来て見ぬものゝふよして

藤原卿

背の山またゞ向へる妹の山

ことゆるすやも打橋こふす



此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、妹背山の妹の山の、直よ、背の山よ向ひてあるよ、其の間を流る、吉野川よ、打橋を渡すダ、此の、妹山の、背の山のいふ事を聽入れての事なるべしとの心なり、打橋との、假初よかけざる橋の事なり、兄のも、同じ心なり、

背の山よこそす打橋なりりせむ

妹山いりに淋しうらまし

本歌の作者、藤原卿といふの、不比等の第二子なる民部卿房前の事ならんといへれど、いづらあらん、未だ考へ定めず、

讀人志らず

人ならむ母の愛づ子ぞあさもよし

紀の河の邊の妹と背の山

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意の、紀の國の河の邊に在る妹背山の、山なればこそ、さてあれど、是が、若し、人よてありしならば、男子と女子との事ゆゑ、其の母の、懷に入れて、撫でさすりて、愛づる事なるべしとの心なり、あさもよしの、紀といふよかゝる枕詞なり、妹背山の、大和よもあ

れど、紀の國キノクニももあり、兄のも同じ心なり、

いつくしき名をも呼ぶ哉カナたらちねの

母の愛メづてふ妹イモと背セの山ヤマ

讀人志らず

をとめらがそなりの髪カミをゆふのやま

雲クモなかくしそ家イヘのあふり見ん

此の歌も、萬葉集に見えざる歌にて、其の意は、木棉山ユフヤマのある地トコロより、縁ユカリある家イヘもあれば、其の邊を見さしと思ひて居る事ゆる、雲クモは、たちりくしてくれぬやうよして貫モラひさしとの心なり、木棉山ユフヤマは、豊後ブフにある山なり、まさ、そなりの髪カミは、振分フリワケ髪カミにて、少女コトメの髪カミなれば、それを木棉山ユフヤマの、ゆふといふ語コトバは繋カけて、枕詞マクラコトバとしるるなり、兄のも、同じ心を詠みよる、

をこめらが髪カミゆふ山ヤマと聞キくりらよ

妹イモが住スむらん家イヘもちりけん

高市連黒人

さくら田へ田鶴鳴き渡るあゆちがと

汐干よけらし田鶴鳴きこころ

此の歌も、萬葉集に見えざる歌よて、其の意の、櫻田の方へ、田鶴が鳴きて渡れるが、さてい、愛知潟よの、汐の干なるべしとの心なり、愛知といへば、尾張なれば、尾張よの、櫻田といふ地もあるなるべし、兄のも、同じ心なり、

あゆちがと汐干よけらし櫻田へ

鳴きてぞこころ田鶴の村鳥

本歌の作者、高市連黒人の、萬葉集よ、歌の見えざるのみよて、其の傳記など、すべて詳らりならず、

山上憶良

ますらをを名をしたつべし後の世よ

聞きつぐ人も語りつぐがね

此の歌も、萬葉集に見えたる歌よて、其の意の、男子と生れての、何事よもあれ、勉め勵みて、後世に至る迄も、聞く人の語り繼ぎて、人の手本となるやうよ爲ねばならぬよとの心なり、がねとい、爲よといふ心の辭なり、さて、兄の、此の歌を見て、自身の、何事もせずて老いよてゐるを慨きて、次の如き歌を詠みより、

後の世よのこさん物も櫃の實の

ひこつとに無き身をいりにせん

内相藤原朝臣

いざ子どもたそござなせそ天地の

かさめし國ぞやまと島根を

此の歌も、萬葉集に見えたる歌よて、其の意の、サア兒輩の、狂態をすな、此の大日本國の、天地の神さちの固め給ひし國なるを知らぬりと、國を忘れて、狂れよる事をする徒輩を警めよる歌なり、今の世よの、殊よ、此の徒輩の多き

を覺ゆるの、一人、此の身のみよもあらざるべし、兄も、亦、同じ心よて、此の徒輩を咎めより、

何すごり騒ぎごめく天地の

神のかさめし國ご知らずや

本歌の作者、内相藤原朝臣の、紫微内相藤原仲麻呂の事なるべし、此の人、天平寶字元年閏八月よ、奏聞せし事もあるよ、此の歌も、萬葉集よ、内相藤原朝臣奏すともあればなり、

大隅の郡司

年を経てかしらの雪もつもれども

志もと見るよぞ身を冷えよける

此の歌の、宇治拾遺物語よ見えよる歌よて、其の意の、自身、年老いて、頭の白くなりて、雪の如く見ゆれども、然れども、志もとを見れば、身の冷えよよりて覺ゆとの心なり、志もとといふの、答なれど、上句よ、雪といひよる故よ、霜を思ひよせていへるなり、此の、郡司よ、怠慢の事ありて、國司の、其

の罪を咎めて、笞をもて鞭させんとせしよ、餘りよ年老いよれば、不便と思ひて、何とりして宥めんと思ひし間、此の歌を聞きよれば、鞭つ事を止めよといふ、兄も、郡司の事を思ひやりて、次の如く詠みより、

年を経て馴れし頭の雪よりも

志もこ見る背ぞ冷えことよりける

葺刈男

君なくてあしりりけりと思ふよも

いと難波の浦ぞ住みうき

此の歌の、大和物語よ見えよる歌なるが、昔難波よ住みし夫婦の、世を住み侘ひて、別れくよなりて、妻の、都よ上り、夫の、難波よ遣り居て、葦を刈りて、賣る事をして、月日を送りて在りしよ、年経て、妻の女の、幸福を得て、貴人の北の方となりしりば、難波の人、今の奈何なりけん、幸福を得てやある、見てしがなと思ひて、侍女を率て、車よ乗りて、難波よ往きて、本の家居のまじりを見てありし程よ、葦荷なひよる男の、乞食のやうなるが來よるを、熱々よ見れば、本の男なりしりば、不便と思ひて、物ども、多く取らせて、一

首の歌を詠みて與へふり、其の歌の、あしりらじとてこそ人の別れけめ何り難  
波の浦も住みうきとありし程よ、男も、もとの妻なりと悟りしまふよ、耻がま  
しくて、居るよも居られず、逃げかくれて、君なくての返歌のみして、行方ま  
れずなりふりといふ、兄も、男の心よなりて詠めり、

世の中そなにその事も此くこそあれ

あしりらんこそ思そざりしを

# 和歌抄終

大正十一年十二月八日印刷  
大正十一年十二月十日發行

和歌抄

定價金壹圓參拾錢

著作者 物集高見

發行者 東京市本郷區駒込林町二百九番地 物集高士

印刷者 東京市本郷區湯島六丁目十一番地 豊田惠吉



發行所 東京市本郷區駒込林町二〇九 廣文庫刊行會  
發賣元 東京市本郷區駒込動坂町九 金屋書店

H131



終

